特集

お茶のある暮らし

日本で古くから親しまれてきた「お茶」。
近年、消費の多様化により
急須でお茶を入れることが
減ってきている方も多いのではないでしょうか。

武雄市では主に
西川登町庭木地区と山内町船ノ原地区で
お茶の栽培がなされています。

少しだけ日常から開放されて、
急須の中で茶葉が開くのをじっと待つ。
そんなひとときを過ごしてみませんか。

武雄製茶工場利用組合 組合長
東島 直行さん（西川登町）
令和元年度 佐賀県茶共進会
茶園の部 優秀賞受賞

「日常」と「非日常」を行き来する

西川登町庭木地区。のどかな集落を抜け山道を進むと、忽然と広がるあたり一面のお茶畑。幾何学模様のように並ぶお茶の木に、芽吹いたばかりの若葉の新緑が鮮やかで、日常とかけ離れたその美しさとスケールに思わずため息が出てしまうほどです。あまり多くの方には知られていないこの絶景。今回は、この景色を作り出す茶農家のおひとり、この地で42年に渡り茶業に携わっていらっしゃる東島さんにお話しを伺いました。幼いころから茶業を営むご両親の手伝いでお茶に触れていた東島さん。「新茶の季節には、家族や近所の方々とお茶摘みを行い、ほのかなお茶の香りに包まれる茶畑で夏の訪れを感じていた。」と生活の中には常にお茶の存在がありました。

高校卒業後、「様々なことに挑戦してみたい」という想いで、一度は会社に勤められましたが、その後退職。家業を継ぐため、お茶の先進地である静岡県へ研修に行ったことが茶農家としての道を歩むきっかけになったそうです。

深さを知る

茶農家となってからも「茶種や茶期、製造によって単価が違い、栽培も天候に左右される」と栽培や製造の難しさに苦労が絶えませんでしたが、「今は栽培から製造、すべてにおいてやりがいを感じている」と話されていました。

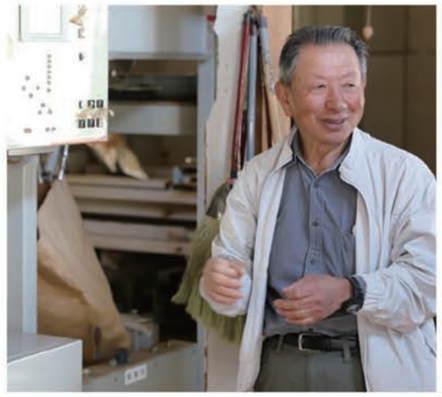
東島さんが特に大切にしているのは「土づくり」。土づくりはお茶の品質を高める上で欠かせない要素であるため、普段から念入りに土の状況を観察し、管理しているそうです。ふっくらと半円を描く「かまぼこ型」の畝（うね）に育つ新緑の茶葉から、そのこだわりが伺えます。

お茶と共に生きる

時代に合わせて消費の多様化が進み、お茶の嗜好（しこう）も変わったことで、これまで中心だった世代が引退することによる後継者不足の問題も迫ってきています。東島さんは「限られた人数で広大な茶畑を管理していく大変さもありますが、一生懸命運営しているのは、次の世代にも武雄の茶業とこの景色をしっかりと引き継いでいけるように」と語ります。

「茶業を通して県内外問わず多くの仲間ができたことも大きな原動力になっている」と語る東島さんの言葉には、これからも武雄の茶業と、この絶景を守りたいという決意がにじんでいました。

神六山に囲まれた隠れた絶景。
西川登町庭木地区。



武雄製茶工場で製茶の工程について
説明する東島さん。